
秘めた想いと倒錯娘

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘めた想いと倒錯娘

【Nコード】

N1352N

【作者名】

まあ

【あらすじ】

サドで邪悪な召喚獣の番外編です。

久保利光に淡い恋心を抱いていた少女『弓永 深月』。

彼女は失恋しながらもその想いを抱き続けている。

少女の想いが実る事はあるのでしょうか？

久保利光の幼なじみと言う異色のキャラに見ました。

投稿ペーすはものすごく遅いと思いますですが楽しんでいただければ幸

い
で
す。

自サイト『悠久に舞う桜』でも連載しています。

予習問題

放課後、人気のない図書室に2人の生徒の姿が見える。

「ねえねえ。利光、さっき見た弓道部の先輩。カッコ良くなかった？ 凜としていて清楚な感じだったけど、どこかにエロスがあった……あの袴姿ね!？」

「……弓永さん。いい加減にしてくれないかい？ 僕は見ての通り自習中なんだよ」

深月は幼なじみの久保利光を引きずりながら、目にした弓道部の練習風景を思い出しながら言うが、利光は深月が鬱陶しいのかため息を吐く。

「あんだ、それでも男!! 袴が乱れた時に見えるあのキレイな鎖骨を見て、欲情しないの!! それは男としてどうなのよ？」

「女性の鎖骨に欲情する弓永さんもどうかと思うけど」

利光は呆れたように言うと、

「ふーん。やっぱり、利光はそっちなね」

「そっちとは何だい？」

「バラよ。薔薇 男の子なのに男の子が好きって奴」

「!?!？」

深月は利光の反応に目を輝かせて言うと、凶星を刺された利光は驚きを隠せないが、

「良い。必ず、良い男とからみなさいよ。変な男に捕まるのは止めてよ」

「弓永さん、君は僕を軽蔑しないのかい？」

深月は気にする事なく、言い切ると、

「だって、好きな人の応援ができるのは素敵な事ですよ。ふられちゃったのは残念だけどね」

あっさりと自分が利光に好意を寄せていた事を言い、

「じゃあ、ボクは弓道部に入部届だしてくるよ」

席から立ち上がると振り返って、少しだけ寂しげな笑顔を見せ、

「バイバイ。ボクの初恋」

利光の頬に口づけをした後、やはり失恋は苦しかったようで瞳に涙をにじませながら全速力で図書室を出て行く。

これがボク『弓』永 深月『の初恋が終わった日の事でした。

オリキャラデータ

弓永 深月 ユミナガ ミツキ

性別 女

所属 21E

備考：弓道部に所属する少女。入学した時は成績は上位だったが、入学早々に弓道部の練習を見て部員の『凜とした姿がエロかった』と言っただけで入部。部活にはまり勉強は完全におろそかになった猪突猛進形の少女。
薄い本が大好きなぶっちゃけ、腐女子だが好きなものは好きと言うタイプのため、隠していない。
久保利光と幼なじみであり、利光が明久に思いを寄せる様子を目を輝かせて見ている。
胸のサイズは美波ほどではないが残念。

本宮 葵 モトミヤ アイ

性別 女

所属 2-B

備考：理音、明久、瑞希と同じ小学校の卒業。理音と明久とは顔見知りだったが、瑞希とは面識がない。
内向的な性格で、人と話す事は苦手。
趣味は物語を書く事で将来の夢でもあるが、自分に自信がなく、その性格のためか両親には言い出せずにいる。
友人は少なくクラスの女子からは軽く無視をされてる。
メガネ娘の巨乳。

清瀬 大樹 キヨセ ヒロキ

性別 男

所属 2-C

備考：怜生が通っている幼稚園の園長の子供で学園が終わると良く手伝いをしている。

清水美春の幼なじみでもあり、昔から彼女に恋愛感情を抱いていて何度もアタックしているが美春は気づく事がない。たまに美春の父親からバイトを頼まれて美春の家の喫茶店でバイトをしている姿が見られる。

第1問

(相変わらず、酷い教室だね。瑞希は大丈夫かな?)

深月は最低の設備のFクラスの教室のなかを覗き込み、友人の姫路瑞希を探す。

(ん、いないのかな?)

簡単に見渡すが瑞希は見つからず、自分の教室に戻ろうとすると、

「リオ、ちょっと待ってよ!? ボクが悪かった。悪かったから、その栄養剤は勘弁してください!!」

「何を言ってるんだ? 本当に悪いと思っているなら、甘んじてバツを受けるべきだろ。ほら、口を開ける」

教室の人だかりのなかから、助命を願う声とそれを許さないと言う少年2人の声が聞こえる。

(こ、これは?)

深月はその声に彼女の第6感が働いたようで人だかりをかき分けて行くと、そこには無理やり口を開けさせ、少年の口のなかに怪しげな錠剤を詰め込もうとしている理音と明久が目に入り込む。

(こ、これは? お宝映像? 土屋くんは土屋くんはどこ? もちろん、これはムービーよね? 予約、予約しないと)

深月はうちから溢れくる欲望に忠実に康太からこの映像を購入しよ

うと心に刻みながら2人の様子から目を逸らさずにいる。

「……なあ。アキ、なんか不穏な空気を感じるんだが」

「き、奇遇だね。リオ、ボクも感じるよ」

理音と明久は深月から送られる視線に背中に冷たいものがつたように、動きが停止すると、

「なんで、止めるのよ。かわいい吉井くとサド系のイケメンの絡みよ。続けてよ。これがあればボクはごはん3杯はおかずなしでいけるよ!!」

2人の動きが止まった事が不満なように深月は拳を握りしめて理音と明久に向かい言い、

「アキ、あいつはなんだ？」

「わ、わかんないけど、関わらない方が良いと思う」

「珍しく意見があつたな」

興奮している深月を見て、理音と明久は身の危険を感じながら、2人で深月から距離をとる。

第2問

「呆けてないで続きを見せなさい!!」

「……そんな危ない視線を向けられて続けられるか」

深月は立ち上がり、自分と距離をとる理音と明久に向けて言うと、流石の理音も深月の放つ異様な空気に身の危険を感じ拒絶すると、

「それなら、良いわよ。ボクのなかで勝手に進展させるから……うわぁ。吉井くんって、細身に……って以外と……だ。それに……」

「リオ、あの子を止めてよ!？ ボク、お嬢にいけなくなるよ!？」

深月は理音の言葉に勝手に妄想の世界にトリップしはじめると明久は身の危険を感じたようで声をあげるが、

「お嬢？ 大丈夫だよ。きつと、坂本くんやこっちの子が『俺が貰ってやるから、心配するな』って言って……」

深月は明久の一言に更なる深みに落ちて行く。

「……アキ、俺は今、久しぶりに逃げ出したい気分なんだが」

「ボクも一緒だよ。だけど、このままだとおかしなウワサが立つよ」

「……ああ。それは否定できないな」

理音と明久はトリップしている深月を見て、すでにかかわり合いた

くないようだが、彼女の妄想は口に出ているため、理音と明久は引きつった笑みを浮かべる。

「……とりあえず、あれをどうにかしないといけないな。腐だから……木下姉でも呼んでみるか？」

「止められれば良いけど………伝染したらどうする？」

「……そうだな。危険だな」

「リオ、良い考えないの？ ころ言う時にリオの頭は使うべきじゃないかな？」

「……そうしたいが、データが少なすぎる」

理音と明久はトリップしている深月から距離を取りながら、彼女をどうするか話し込んでいると、

「アキ、前田、あんた達は何をしてるの？」

「美波、それが……」

「あれ？ 深月ちゃん？」

瑞希と美波が教室に戻ってきて、理音と明久の様子に首を傾げる。

「瑞希、知り合いか？」

「はい。えーと、吉井くんには話した事があると思いますけど、前に『たくましい坂本くん』と美少年の吉井くんが並んでると絵になる

ね』って言っていた……」

「姫路さん、この娘とは縁を切るんだ。直ぐにでも!! この娘の話は姫路さんにはまだ早い!!」

理音は瑞希にトリップしている深月の事を聞くと瑞希は深月の事を話し始め、明久は深月が瑞希の友人にふさわしくないと言いたいよ
うで瑞希の肩に手を起き、彼女を説得しようとする。

第3問

「よ、吉井くん!？」

「ア、アキ、あんた。何してるのよ!？ 瑞希から放れなさいよ」

瑞希は明久の手が自分の肩に触れた事に顔を赤くすると美波は面白くないようで明久を瑞希から引き離す。

「……瑞希、お前の交友関係には何も言うつもりはない。周りのクラスから見れば俺達も同じように思われてるだろうしな。だが、あいつの妄想を止めてくれ。このままだと、俺もアキもあいつの頭の中で大切な尊厳ものを無くしそうだ」

「そつだよ。姫路さん、あの娘を止めて!!!」

理音と明久が瑞希に深月を止めるように頼んだ時、

「……もう、死んでも良い」

深月は大量の鼻血を出してそう言っていると眠るように畳の上に倒れ込み。

「えっ!？ な、何、この娘!？」

「み、深月ちゃん、死んじゃダメです!？」

美波は展開についていけないようで頭を押さえ、瑞希は心配そうに深月を抱きかかえる。

「……ねえ。リオ、これって、ボクがムツツリーニを抱きかかえる時ってこんな感じなのかな？」

「そうだな」

理音と明久は顔をひきつらせながら頷いていると、

「吉井くん、前田くん、深月ちゃんを保健室まで運ぶの手伝ってください!？」

「ああ。だが、その前に……」

瑞希は友人の命の灯火が消えかかっているため、理音と明久に助けを求めると、理音は懐から怪しげな錠剤を取り出す。

「リオ、それって何の薬？」

「止血剤と増血剤だ。康太にやるために作ったんだがな」

明久は理音が出した錠剤に少し引くと理音はため息を吐きながら、深月の口のなかに錠剤を流し込むと簡単な処置をした後、彼女を抱きかかえて、

「行くぞ」

「は、はい」

深月を保健室に運ぶ。

第3問（後書き）

自分で書いておいて言うのも何ですが、深月は吹っ飛んでますね。

受け入れられてるのかな？

第4問

「……あれ？　ここは保健室？」

深月は鼻血を流して気を失っていたため、どうして自分が保健室にいるかわからずに首を傾げると、ベッドの隣には友人の姫路瑞希と先ほど深月の妄想の中で明久と情熱的な絡みを行っていた少年がいる。

「深月ちゃん、大丈夫ですか？」

「ん？　起きたか」

瑞希は深月をよほど心配していたのか、涙目で深月に抱きつき、少年は深月に冷たい視線を送るが、

(……このポリウムがたまらないわ。瑞希の胸は極上ね)

深月は自分の欲望に忠実で抱きついてきた瑞希のたゆんたゆんな胸を揉みはじめ、

「深月ちゃん、何をするんですか!？」

さすがの瑞希も自分の胸をかばうように深月から離れる。

「瑞希、ワンモアチャンス」

「お前は何がやりたいんだ。女の胸を揉むのは男の特権だと知らないのか!?!」

「ちょっと、前田くんもどこに手を回してるんですか!？」

深月は名残惜しそうな表情で瑞希に言うと少年は瑞希の背後から彼女のたわわな果実に手を伸ばし、瑞希は顔を赤くして少年から離れるが、

「特権？ 何を言ってるのかな。君は女の子の気持ち良いところは女の子にしかわからないんだよ。君は優しく瑞希の弱点を突く事ができるの?」

「当然だ。なんなら勝負して見るか？ 先に瑞希を……」

「その勝負、受けてたつわ」

深月は少年を挑発するように言うと少年は表情を変える事なく、深月に勝負を挑み。深月はこれから性的なイタズラをされる友人を気にかける事なく、自分の欲望を優先する。

「あの。2人とも、勝手に話を進めないでください」

瑞希は深月と少年の様子に身の危険を感じたようで2人から離れて言う。

第5問

「瑞希は黙ってる(なさい)!!」

「えーと、被害を受けるのは完全にわたしなんですけど」

深月と少年の返事は完全に重なり、瑞希はスリ足でこの場から逃げ出そうと後ろに下がり始めた時、

「……前田、あんたは何をしてるのよ」

「あはは。なんか楽しい事になってるね」

2人の少女が保健室に入ってくる。

「美少女が2人も増えた……それに美少年まで!? ここはどこの楽園よ!!」

「普通の保健室よ」

「保健室の時点で楽園だ」

「だよね」

「前田!! 愛子!!」

深月は2人の美少女の姿に興奮するが、少年を呼んだ少女が冷たい視線を送る。

「わかってるよ。瑞希ちゃんは大丈夫だった？ 前田くん、ダメだよ。瑞希ちゃんは純情なんだから、保健体育の実技なら、僕が教え……ふえ！？」

「工藤、勘違いするな。教えるのは俺だ」

「あ、う、うん」

少女の1人が少年を挑発するように言うと、少年は彼特有なのだろうか、少し悪意の見える笑顔を見せると少女を深月の横になっているベッドに引き寄せると少女は顔を少し赤らめる。

「瑞希には逃げられたから、この娘で勝負と言う事ね」

「違う。これは俺の趣味だ。お前とは工藤の相手をするのと一緒に直接対決で勝負を」

「望むところよ！！」

「望むな！！」

少年の言葉に少女は話の途中で返事をするともう1人の少女から、当たり前前のツツコミが入り、少女は深月と少年の耳を引っ張る。

「……まったく、秀吉から話を聞いて来て見れば。前田、あんたは学校で何をしでかす気よ？」

「木下姉、お前には関係ないだろ」

少女は少年に気があるようで、深月に嫉妬が混じった視線を向けな

がら少年に説教を始めると、

「瑞希ちゃん、彼女が何してたか聞かなくて良いの？」

「あ、はい。深月ちゃん、Fクラスに用事があったんですか？」

「いやさ。週末、前に瑞希と約束してた買い物に行けそうって言いに行こうとしたんだけど……美少年2人の絡みが見えたから、飛んじやった」

深月は舌を出し言つと、

「うわ。この娘、あっちの」

「木下姉、お仲間だぞ」

「あ、あたしは違うわよ。そう言うのはちょっと、読むけど、あたしは男の子が好きなのよ!!」

瑞希以外は三者三様の反応をする。

「えーと、優子も本当にそっちなんだ？」

「ちょっと待て!?! 愛子、あたしは違う!!」

「なら、男好き? そうだよな。前田くんに馬乗りになってるんだから、男好きだよな」

少女は同性愛者ではないと否定するが、少年に馬乗りになり折檻を始めているため、もう1人の少女にからかわれる。

「えーとき。ボクが言うのも何だけど、自己紹介しない？　なんかグダグダだし」

「そ、そうですね」

深月は少し冷静になったのかこの状況に苦笑いを浮かべながら言う
と瑞希は同意を示す。

第6問

「えーと、工藤 愛子さんに、前田 理音くん、木下 優子さん…」

保健室にいたメンバーは簡単な挨拶を交わすと深月はもう1度、確認するように3人の顔を見回した後、

「で、ツンデレ系腐女子の木下さんはクール系サド少年が好きと」

「弓永さん、な、何を言ってるのよ!？」

優子を玩具と判断したようで、優子に向かい言っていると優子は顔を赤くしながら、深月の言葉を否定するが、

「もう、今更だし、優子も慌てなくても良いんじゃないの」

「そうですね」

瑞希と愛子は苦笑いを浮かべる。

「……とうとう、M属性までつけたか。お前もやはりこの学園の生徒だな」

「ち、違っわよ!？」

しかし、理音は優子が自分を好きな事に気づいていないようで表情を変える事なく言っていると、優子は顔を赤くしたまま否定するが、

「そうそう。いじめてくれる相手が好きだからの属性だよ。前田くんも頑張らなきゃ」

「ん？ よくわからないが」

「わからなくて良い!？」

深月は優子の気持ちに気づいていなさそうな理音の肩を叩きながら言うと、理音は首を傾げ、優子はこのままでは自分の理音に向けた好意がバラされてしまうと思ったようで、理音の腕をつかむと、

「愛子、姫路さん、あたしと前田は先に教室に戻るわ」

「待て。俺は弓永と直接対決する日取りを……」

「良いから、行くわよ!！」

これ以上、深月と愛子に何かを言われる前に撤退を始める。

「もう、はっきり言えば良いと思わない。怜生くんだって優子にはなついでるし、脈はあると思うんだけどな」

「そうですね」

理音と優子の様子を見て、瑞希と愛子は苦笑いを浮かべるが、

「んぐ、でもさ。やっぱり、怖いじゃない？ せつかく、仲が良いのに告白して失敗した時にギクシャクしちゃうし」

深月は優子の気持ちもわかると言いたげに苦笑いを浮かべた後、

「さてと、そろそろ、戻ろう …… 2人がボクの相手をしてくれるなら別だけども」

ベッドに腰を下ろし、2人を手招きして呼ぶが、

「帰ろっか」

「そうですね」

「ちょっと、「冗談だつてば!？」」

瑞希と愛子は保健室を出て行き、深月はその後を追いかけて行く。

第7問（前書き）

久しぶりの更新です。遅くなってしまい申し訳ありませんでした。

第7問

(……あれ？ しまったな。机のなかに忘れてきたなか)

『弓永、どこに行くの？』

「すみません。教室に忘れ物したみたいで」

深月は弓道場を出るとEクラスの教室に戻り、

「……あつた。あつた。せっかく手に入れた『雄二×明久本』を忘れるわけにはいかないよね」

漫画同好会作、ムツツリ商会で販売されている秘蔵の本を手に笑顔を浮かべて校門まで歩いていると、

「弓永さん、どうしたんだい？ こんな時間にいつもは弓道場から直接帰っているのに」

「あつ。利光も今帰り？」

幼なじみであり、彼女の失恋の相手でもある『久保 利光』が深月を見つけて声をかけてくる。

「ああ。少しだけ調べものをするつもりだったんだけど、気がついたらこんな時間でね」

「ボクは教室に忘れ物をして取りに行ってたんだよ。今月の新刊だけど、見る？」

利光は深月に自分がこの時間になった理由を話すと深月はイタズラな笑みを浮かべて紙袋に入れてあるBL本を取り出して利光に見せると、

「……弓永さん、いくら、多くの生徒が下校した後とは言え、神聖な校舎でそんなものを出すのはどうかと思うよ」

利光は本の内容が自分の想い人の『吉井明久』のため、少しだけ興味を惹かれるが咳払いを1つして深月に本をしまっように言う。

「ふーん。反応薄いな。僕は利光が吉井くんの事を恋愛対象として見てるのを知ってるんだから、隠さなくて良いのに」

「あのねえ。弓永さん」

深月は利光の反応につまらないと言いたげに言う。利光はため息を吐くが、

「そんな事を言っていると愛しの吉井くんはすぐにどこかに行っちゃうよ。最近は坂本くん、木下くんに幼なじみなイケメンサド男まで居るんだからね」

深月は利光をからかうように笑う。

「イケメンサド男？ ……彼は大丈夫だよ。うちのクラスの木下さんと仲が良いから」

「でも、知ってる？ 木下さんもボクと同種の人間だよ。前田くんをそそのかして吉井くんにあんな事やこんな事をさせちゃうかも」

利光は深月の言う人間を理音だと理解して大丈夫だと言うが深月は利光の不安を煽るように言い、

「ボクとしては欲望を満たしてくれれば吉井くんの相手は誰でも良いんだけど、利光は違うよね？」

少しだけ自分をふった利光へ意地悪をしたいように挑発するように笑う。

第8問

「……まったく、弓永さんは何を言いたいんだい？」

「べつに、やっぱり、少しは意地悪したいわけだよ。ボクは男の子に負けてるわけだしね」

「……」

利光は深月の挑発にのる事なく、呆れたのかため息を吐くと深月は冗談のような軽い感じで返すが利光は自分の事を好きだと言ってくれた深月への罪悪感があるのかその言葉に戸惑ったような表情を見せると、

「利光？ どうしたの？ いまさら、ボクに対して罪悪感でも感じた？」

「……そう言う事を言わないでくれるかい。責められているようで居心地が悪いんだよ」

深月は利光の顔を覗き込んでくすくすと笑い、利光は深月の次の行動に自分はまたからかわれているんだと理解したようで困ったような表情で笑う。

「べつに前にも言ったでしょ。ボクは利光を応援するよ。男の子同士なんて考えたただけでごはん3杯はいけるし！！」

「……弓永さん」

「あつ!? でも、吉井くんが相手の場合は応援できないよ。その場合はボクは瑞希を応援するから、だから、他の良い男とね」

深月は利光を自分の趣味のために拳を握りしめながら応援すると良いながらも瑞希の事があるため、明久が相手の場合は無理だと言った時、

「利光、携帯鳴ってない?」

着メロを変えていないのか携帯電話の機械的な呼び出し音が聞こえ、深月は利光に聞くと、

「ん? そうみたいだね……家からみたいだ」

「早くでなよ」

「そうだね。もしもし……」

利光は携帯電話を取り出して電話の相手を確認するとディスプレイには『自宅』と表示されており、利光は電話に出る。

「……わかったよ。それじゃあ、気をつけて、弓永さんにも伝えておくよ」

「利光、ボクも関係ある事?」

利光が電話を切るときに深月の名前が出たため、深月は利光に聞くと、

「そうだね。僕のところも弓永さんのところも両親が2人とも急用

ができたみたいで、また、夕飯を弓永さんに作って貰えと」

「そうなの。良光は？」

利光は深月に夕飯を世話になれと言われ事を告げ、深月も利光も幼なじみと言う関係からかいつもの事のようにであり、深月は利光の弟の『久保良光』の夕飯も作るかと聞くが、

「今日は友人のところに泊まりに行くと言っていたよ」

「……友人ですと？ 良光も大人になるわけですな。利光、先をこされるよ。どうするつもり？」

「……バカな事を言わないでくれるかい」

利光は良光は今日は家にいないと言い、深月はニヤニヤと笑い利光をからかおうとするが利光の反応は薄く、

「つまんない。ノリ悪い」

「……つまらないじゃないよ」

深月は不満そうに口を尖らせると利光は眉間にシワを寄せる。

「それじゃあ、買い物して帰ろうか？ 利光は何か食べたいものある？」

「いや、特にないよ。弓永さんの料理はどれも美味しいからね。弓永さんに任せるよ」

「そう？ それなら、一先ずは商店街に行ってから考えよう。と言
う事で利光、荷物持ち、よろしくね」

「それくらいはやるよ」

夕日で染まる道を深月と利光は並んで商店街に向かう。

深月の顔は夕日の色とは異なる朱で染まっているが利光は気づく事
はない。

第9問

「あれは、怜生くん？」

「怜生くん？ 利光、あんな小さな男の子に手を出したら、犯罪だよ」

「……弓永さん、おかしな事を言わないでくれないかい」

深月と利光は商店街で夕飯の買い物が終わらせると利光が怜生が1人でいる事に気づき、深月は利光の視線の先にいる怜生と利光を交互に見た後、利光から少し距離を取ろうとすると利光は眉間にしわを寄せ、

「Fクラスの前田くんの弟だよ。前田くんはいないみたいだけど」

「1人は不味いよね。利光は知り合いなら言ってみようか？」

「そうだね」

利光は怜生が理音の弟だと言う事を深月に話すと2人で怜生の元に歩きだし、

「怜生くん、前田くんはどうしたんだい？」

「……お兄ちゃん、あそこです」

利光が怜生に理音はどうしたかと聞くと怜生はタイムサービスでおばちゃん達が群がっている戦場を指差す。

「……えーと、理音って主夫？」

「……とりあえず、家事は一通りこなしていると聞いたよ」

深月は苦笑いを浮かべながら言う。利光は眉間にしわを寄せながら言う。

「だからと言っても怜生くんを1人にするのはどうなんだろうね。誘拐とかだつてあるのに」

「大丈夫だ。怜生におかしな人間が声をかけたら、家から自動追尾型ミサイルが飛ぶようにしてある」

「……お兄ちゃん」

深月は理音の行動が不謹慎だと言うと音もなく理音が深月と利光に声をかけ、戻ってきた理音に怜生が駆け寄り、

「深月、久保、買い物か？ ……何で、一緒なんだ？」

「うん。夕飯の買い物だよ。利光と一緒になのはボクと利光は幼なじみだから、今日はボクの家と一緒に夕飯。デザートはもちろんボク

」

「……弓永さん、怜生くんの前でおかしな事を言わないでくれるかい」

理音は深月と利光が一緒の理由を聞くと深月は冗談を交えながら利光と幼なじみだと言うがその冗談は下ネタが混じっており、利光は

眉間にしわを寄せる。

「ん？ 幼なじみか？ ……ん？」

「理音、どうかしたの？」

「ん？ 気のせいかな？ 少し深月と久保の脈拍が上がったように感じたんだが」

理音は深月の冗談に利光にわずかな反応があった気がすると思いを傾けると、

「わけのわからない事を言わない。それとも理音がボクをデザートにしてみる？」

「ん？ そうだな。なかなか素敵な誘いだね、優子の機嫌が悪くなるから止めておこう。それに……なあ、久保」

「……前田くんも『永さんの質の悪い冗談に付き合わないでくれるかい？』」

深月は楽しそうに笑いながら理音をからかおうとするが理音は利光を見ながら優子に悪いと言い、利光は理音と深月の様子にため息を吐き、

「そうだな。止めておこう。そろそろ、帰らないとお互いに大変だろっしな」

「そうだね。怜生くん、またね」

「……はい……」

理音は利光の様子にくすりと笑うと家に帰ると言い、深月はしゃがみ込んで怜生と目線を合わせて言う。と怜生は深月の言葉に返事をするが深月の名前がわからないため首を傾げ、

「あ、そうだね。ボクは深月だよ」

「みつきお姉ちゃん？」

「うん。みつきお姉ちゃんだよ」

深月は笑顔で怜生に名乗り、怜生は少し自信がなさそうに深月の名前を呼ぶと深月は笑顔で怜生を抱きしめる。

「……久保、お前、男だけじゃなかったんだな」

「お、おかしな事を言わないでくれるかい？」

理音は利光が怜生相手に楽しそうに笑っている深月の顔を見て優しいな笑みを浮かべたのを見て先ほど感じた違和感が確信に変わったように利光に言う。と利光は少し慌てた様子だが冷静を保とうとするが、

「深月、怜生を放してくれ。怜生、帰るぞ」

「……はい。みつきお姉ちゃん、さようなら」

「うん。バイバイ、怜生くん」

理音はそれ以上は利光に何も言う事はなく、深月に怜生を放すように言うと深月は怜生から手を放し、深月と怜生は改めて挨拶を交わし、

「利光、ボク達も帰る」

「ああ。弓永さん、荷物、貸して」

「うん」

深月が利光に自分達も帰ろうと言うと利光は深月から買い物袋を受け取り、2人で歩きだす。

第10問

「おかえりなさい。食事にする？ お風呂にする？ それとも、わた・し」

「……深月、おかしな冗談は止めてくれないかい？」

利光は1度、自分の家に帰った後、制服を着替えて深月の家の玄関を開けると深月は利光をからかおうとするが利光は家では深月を幼なじみらしく名前で呼んでいるようで眉間にしわを寄せながら深月の冗談には付き合っていないと言つと、

「利光はノリが悪いな。それとも、やっぱり、裸エプロンじゃないと萌えない？ 何なら、用意するけど」

「……いい加減にしてくれないかい。深月、君はもう少し女性としての恥じらいと言つものを」

「はいはい。その言葉は耳にタコだよ。それより、ご飯はまだ時間かかるし、お風呂に入ってきてなよ。掃除してお湯は入れてあるから」

深月は利光の反応がつまらないと頬を膨らませると利光は深月の態度に眉間にしわを寄せたまま深月への説教を開始しようとするが深月は逃げるようにキッチンに戻って行き、キッチンの入口から顔を出して利光にお風呂に入るように言つ。

「あのね。いくら幼なじみの家だと言つたつて」

「別に今更、何か言うような間柄でもないでしょ。それにボクはシ

ヤワーで済ませるのでってイヤなの。利光と違ってボクは部活もして
るわけだし、シャワーだと疲れが取れた気がしないんだよ。お父さ
んもお母さんも遅いなら、1人でお湯を入れるのはもったいないで
しょ。それとも……ボクと一緒に入る？」

「……1人で入るよ。それじゃあ、お言葉に甘えさせて貰うよ」

利光は流石にお風呂まで借りられないと言うと深月は利光が何を気
にしているのかわからないと言いたげにため息を吐いた後、利光い
じりを再開させようとするが利光は疲れたように肩を落とすとお風
呂場に向かって歩き出し、

「バスタオルはいつものところに置いてあるから、それを使ってね。
後、シャンプー、切れそうだと思ったからなくなったら入れといて」

「わかったよ。シャンプーの替えもいつものところだね」

「うん。お願いね」

深月は利光にシャンプーの詰め替えを頼むと利光もなれているよう
で振り返る事なく返事する。

「……やっぱり、利光には『私』は恋愛対象外なんだよね」

深月は冗談には見えるが精一杯のアタックに反応しない利光の様子
に少し悲しくなってきたようでそう呟くと彼女の眼には少し涙がに
じむが、

「……今更、言っても仕方ないよね。『ボク』はあの日にふられた
んだから、ふっ切らないと、いつまでも泣いてなんていられないん

だから、そうしないといけないんだ。彼女にはなれないけど『ボク』は利光の幼なじみである事を選んだんだから、利光のそばにいる事を選んだんだから、そうするって決めただから」

深月は時折溢れ出してくる自分の中に押し込めたはずの想いを大きく振った後、両頬を2回叩いて再び、自分の中に押しこめると彼女の想い人や友人達にいつも見せている『笑顔の仮面』をつけ直し、

「よし、いつも通り　さてと利光がお風呂からあがってくる前にご飯を作らないとね」

夕飯の準備を再開させる。

第11問

「……凄いな」

深月の家で夕飯を食べた次の日、利光は深月に用事があるため、部活終了時間まぎわに弓道部が使っている練習場に行くと深月の放つ矢は的の中心を射抜いて行く姿に利光は感心したようので息を漏らすと、

『あつ、久保くん、良いところに来たね。ちょっと、聞きたい事があるんだけど』

「何ですか？ 先輩」

利光の姿を見つけた弓道部の先輩が利光に声をかける。

『なんか、深月の様子がおかしいんだけど、何かなかったかな？ 君は幼なじみだし何か知らないかと思つて』

「弓永さんの様子がおかしい？ 僕にはそんな風には見えませんけど」

『……うん。久保くん、勉強ばかりじゃダメだよ。もう少し、色々な事も学ばないと』

先輩は部活中に深月を見ていたようだが彼女はいつもと違った雰囲気があると思ひ、幼なじみの利光に声をかけたようだが利光は首を傾げると先輩は深月がかわいそうに思えたようので肩を落として笑うと、

『……あの子、いつもはもっとのびのびと弓を引くのよ。のびのび
って言っても感覚ね。例えるなら弓と矢があの子の1部みたい
に弓を引く姿も矢を放った後の姿も本当に自然に見えるんだけど、
それが今日はきつちりと何かを押さえつけるように自分の力で弓や矢を
抑えつけようとしてる感じがするの。彼女らしさがないのよ』

「感覚で言われても僕にはどうしようもありませんが」

『……そう。なら、良いわ。もう少しで練習も終わるから少し待っ
てくれる』

真剣な表情になり、利光に向かい言うが利光は表情を変える事なく、
自分にはわからないと言い、そんな利光の姿に先輩はこれ以上は何
かを言っても無駄だと判断したようで練習に戻って行き、

「……むしろ、僕としては先輩達が見ている深月の方が無理をして
いるように思えますよ……それに、僕には深月に何かを言う資格が
ないんですから」

利光は先輩の背中を見送った後に視線を深月に向けてつぶやいた時、

「利光、何してるの？ 何？ ようやく、袴から見える鎖骨の素晴
らしさに気づいた？」

「……冗談はやめてくれないかい。弓永さん、君が昨日、今日の帰
りに強化合宿の買い物の荷物持ちをしると言っただろ」

「……」

深月が利光の姿に気づき、利光が練習場に来た理由を聞くと利光は眉間にしわを寄せながら、深月に約束させられた事を守りに来たと言つと深月はすっかり忘れていたようで利光から視線を逸らし、

「……まさか、自分で言つといて忘れていたわけじゃないだろうね？」

「アハハ。トシミツハナニヲイツテルノカナ。ソナワケナイジヤナイ。ボクハチャントオボエテイタヨ」

利光は深月の態度に深月がすっかりと忘れていたと気づいたようで眉間にしわを寄せると深月は誤魔化すように笑い、

「ボク、着替えてくるからもう少し待っててね」

『深月！！ 練習場で走らない』

「はい。すいませんでした」

深月は利光から逃げるように全力で駆け出すと深月の様子を見た先輩が深月を怒鳴りつけ、深月は立ち止まり先輩に頭を下げ、

「……まったく」

利光は深月の様子に呆れたようなため息を吐くがその表情は愛おしいと女性へ向ける優しいげな笑みである。

第12問

「……弓永さん、こんなに買う必要があるのかい？」

「利光、何を言ってるのかな？ 移動日も入れて4泊5日なんだよ。バスタオルに基礎化粧品、着替えにその他モロモロ、必要なものはたくさんあるでしょ」

「バスタオルなんて荷物になるもの何枚も持っていく必要があるのかい？ 部屋に干して使えば良いじゃないか」

深月と利光は2人で強化合宿に必要な買い物をしているのだが、利光は深月が次から次に商品をカートに乗せて行く姿に買い過ぎだと言いたげにため息を吐くが、

「……利光、不潔な事を言わないでよ」

深月は利光の言葉に割とどん引きしているようで冷めた目で見た時、

「ん？ 深月に久保、また会ったな」

「怜生くん、こんにちは」

「みつきお姉ちゃん、こんにちはわです」

カートに深月と同じように大量の商品をのせた理音と怜生が声をかけてくる。

「前田くんも強化合宿の買い物かい？」

「ああ。それなりに日程もあるしな。流石に洗濯をせすに同じバスタオルを使うのは衛生面や健康面を考えると良くないからな」

「やっぱり、理音もそう思うよね。ほら、利光、ボクの考えは間違っていないんだよ」

利光は理音のカートを見て、商品の多さに眉間にしわを寄せるが理音も深月と同じ考えのようであり、深月は利光に勝ったと言いたげに言い、

「悪かったよ。しかし、その割には他にも買っているみたいだけど」

「利光、他人の買い物内容を見るのは失礼だよ」

「ん？ まあ、俺や怜生のもは気にする必要はないが、後はちょっと入用になつてな」

利光は苦笑いを浮かべながら深月に謝つた後、それでも理音と怜生の買い物が多いと言いたげにカートに視線を戻すと深月は利光の行動は失礼だと言うが理音は気にする事なく、カートの中から怜生用の水着を取り出し、

「水着？」

「ああ、久保は雄二や優子から聞いていないのか？」

「ああ。確か、土曜日に前田くん達でプールを借りられると言ってたね」

深月は意味がわからないようで首を傾げるが利光は雄二が優子、翔子、愛子の3人を誘っていた事を思い出したようで頷くと、

「まあ。借りれると言うか、罰掃除のついでだ。俺は強化合宿前に終わらせないといけない仕事があるんでな。その間、怜生をアキ達に預けておこうと思ったんだが昨日。部屋を探したんだが怜生は水着を持ってなくてな。それで買いにきたんだ」

「そうなの？ 怜生くん、プールは初めて？」

「……はい。泳いだ事ないです」

「そうなんだ？ 楽しみだね」

「はい」

理音は利光には詳しい話が言っていないと理解して改めて、深月と利光にプールの罰掃除の話をする。深月はしゃがみ込み怜生と視線を合わせながら怜生にプールの事を聞くと怜生はプールも楽しみなようではあるが理音と遊べる事が楽しみなようで大きく頷き、

「前田くん、怜生くんは泳いだ事がないなら、浮き輪は必要じゃないかな？」

「ん？ そうか。すまない。それは頭になかった」

利光は怜生が泳いだ事がないと言う事で理音に怜生用に浮き輪を買っていく事を薦めると理音は利光の言葉に礼を言う。

「それなら、これだよ。浮き輪と言ったら『シャチ』」

「……弓永さん、学校のプールには似合わないから」

「シャチさん」

深月は理音と利光の会話を聞くと怜生の手を引いて『シャチの浮き輪』を手に取り、利光は深月の行動に大きなため息を吐くが怜生は目を輝かせている。

「……前田くん、あれ以外にも子供用の普通の浮き輪を買っておいた方が良いでしょう」

「そうか。わかった……ん？ そうだ。深月に久保もせつかくだからこないか？」

利光は怜生の様子に話を折るの良くないと感じたようでも理音に普通の浮き輪を買うように言うと理音は頷いた後、2人をプールに誘うが、

「お誘いは嬉しいんだけど、ボク、部活があるんだよね。強化合宿中は練習できないからサボれないよ」

「僕もちよつと都合が合わないんだ」

深月と利光は申し訳なさそうに理音に謝り、

「そうか。それは残念だ」

「……はい」

怜生は深月が気に入ったようでさびしそうに目を伏せ、

「ゴメンね。怜生くん、また、今度、遊ぼうね」

「はい」

深月は怜生の頭を撫でながら優しくな声で言うと怜生は頷き、

「それじゃあ、買い物続きをしようか？」

「そうだな」

深月は3人に残りの買い物済ませようと言い、4人は目的の買い物終わらせた後、解散する。

第13問

「……弓永さん、どうして、あの大量の荷物がそんなリュック1つに入るんだい？」

「利光、さっきからしつこいよ。入れられないと思うのは勝手だけど、ボクから言わせて貰えば収納が下手なのを言い訳にしているだけだよ」

「……いや、明らかにいろいろな法則を無視してると思うんだけど」
強化合宿の朝、深月と利光は集合場所である文月学園に向かって歩いていると利光はカート一杯だったものが深月の背負っているリュック1つに収まっている事が理解できないように眉間にしわを寄せるが深月は利光は何もわかってないと言いたげにため息を吐くが利光は納得がいかなさそうに自分が理解できない幼なじみを見てため息を吐くと、

「何？ 利光の荷物だってちゃんと入ったでしょ。あれだけ、ボクと理音が言ったのにカバンに入らないとか嘘言っただバスタオルも1枚だけにしようとするし」

「……それに関しては感謝はしてるけどね。僕は帰りに同じようにカバンに詰められる自信はないよ」

深月は利光のため息が気に入らないと言いたげであり、利光は深月の様子に自分が折れた方が良く判断したようで一先ず、話を終わらせようとする。

「その時は呼んでくれればボクが詰め込むよ。それでも荷物が減るようにお弁当箱も使い捨てるものにしたんだからね。文句を言わない。まったく、世の中、エコだ。リサイクルだって言ってるのにもつたいない」

「悪かったよ。だけど、帰りの荷物はどうにかして自分で詰めるよ。流石に弓永さんに男子部屋まで来て貰うわけにはいかないしね」

「……ちつ、男子の青春の汗の匂いがする部屋でいろいろな妄想をしようと思ったボクの計画が」

深月は利光が荷物を詰め込む自信がないと言うのを聞いて男子部屋に行くと言うが利光はそれはダメだと言うと深月は他の目的があったように舌打ちをすると、

「弓永さん、いい加減にしてくれないかい？ だいたい、街中でおかしな妄想をしないでくれないかい」

「はいはい。わかってるよ。学園以外では気を付けるよ」

「……学園でもだよ」

利光は深月の本能に忠実なところにため息を吐くと深月は利光の言葉に空返事をし、利光は深月の様子に肩を落とす。

「学園では大丈夫だよ。同じ趣味の人も多いしね。利光の知っている人ならAクラスの木……」

「おはよう。久保くん、弓永さん」

深月は自分と同じ趣味の人間が他にも文月学園には居ると言おうとすると優子が2人を見つけて声をかけ、

「……弓永さん、おかしな事を言わないでくれるかしら」

「わかったから、そんなに青筋を立てないでよ。だいたい、木下さんは趣味に理解がある彼氏なんだからそこまで隠す必要もないでしょ」

「そう言う事じゃないわよ」

優子は笑顔で深月に余計な事を言うなと深月は笑い、優子は眉間にしわを寄せるが、

「それじゃあ、ボクはクラスの方に行くね。利光、木下さん、また後でね」

「ああ」

深月は優子から逃げるように利光に自分のリュックを渡すと1人で駆け出して行き、

「……木下さん、行こうか？」

「……そうね。久保くんも大変ね」

利光は優子に声をかけて2人でAクラスの集合場所に歩き出す。

「おはよう。代表」

「おはよう。弓永さん……ねえ、荷物、ずいぶんと少くない？」

深月が利光と優子と別れてEクラスの集合場所に着くと人員の確認をしているクラス代表の『中林宏美』に声をかけ、宏美は笑顔で深月に挨拶を返した後、深月の荷物が少ない事に首を傾げ、

「結構、多くなったから利光に預けてきた。ウチのクラスは小さなマイクロバスなのにAクラスはリムジンバスだよ。広いんだし、それくらいは良いかな？　と思ってね」

「久保くんに？　そう……幼なじみかあ」

深月は自分の荷物は利光に預けたと言うと宏美は頷き、

「あ、言うておくけど、ただでそんな事はさせてないからね。その分、今日は利光のお弁当を作ったし、何より、あいつ、昨日の夜までまったく強化合宿の準備してないんだよ。あれだけ、ボクと理音が必要だつて言うてもバスタオルは1枚しか準備してないし」

「そ、そうなんだ」

「まったく、確かに勉強はできるのかも知れないけど、他の事に無関心するのはどうなんだろうね。周りはそんな姿がクールに見えるつて言うんだけど」

深月は周りからの利光の評価に納得がいかない部分もあると首を捻りながら言うが宏美は羨ましそうに深月へと視線を送る。

第14問

「ありがと。利光、帰りもよろしくね」

「わかってるけど、弓永さん、少し考えてくれないかいかな？ 男子部屋の中に弓永さんが入ってくるのは問題があると思うんだけど」

深月は宿舎に着き、先に宿舎に到着していたAクラスの男子部屋に顔を出すと深月の行動に利光は眉間にしわを寄せるが、

「問題？ えー、ボク、利光に襲われちゃう。きゃー、誰か助けて」

「……弓永さん、そういう冗談は止めてくれないかな？」

「わかってるよ。ボクは利光『は』ボクを含めた女の子を力づくで押し倒すような事はないって信じてるから」

深月は利光をからかうように周りの男子生徒に助けを求め、利光は彼女の行動に大きなため息を吐くと深月は目を輝かせながら利光は女の子を襲うような事はしないと云った後、

「それに、ボクが他の男の子に襲われそうになったら利光が守ってくれるよね？」

「……まあ、そんな事にはならないとは思っけどね」

まっすぐに利光の目を見て利光を信じてると言っていると利光は深月から視線を逸らす。

「じゃあね。利光、ボクは部屋に戻るから、勉強頑張つてね」

「弓永さん、勉強を頑張るのは君もだよ。後、あまり、クラスの友達に迷惑をかけないようにね」

「はいはい。利光もクラスの『男の子』に迷惑をかけたらダメだよ」
「まったく」

深月は利光の表情に満足げに笑うと自分の荷物を持ってAクラスの男子部屋を出て行き、利光は彼女の行動のため息を吐くと、

『久保くん、弓永さんと仲良いよね。幼なじみって良いよね』

『ホントだよ。あんな美人の幼なじみなんて羨ましいよな。幼なじみだって言うだけでそれだけで有利だからね』

『まったく。ウチの代表なんて、坂本だもんな。俺、憧れてたのに。幼なじみか、俺にもかわいい幼なじみがいてくれたらなあ……』

「ど、どうしたんだい？ いきなり」

深月と利光のやり取りを見ていたAクラスの男子生徒達は利光を囲むと利光はクラスメート達の反応に驚きの声を上げるが、

『久保くん、本当にわからないのかい。弓永さんはウチの代表とは違うタイプの女子生徒でかなりの人気を持っているんだよ』

「そうなのかい？」

「美人で明るくて家事も万能らしいじゃないか。ちょっとおバカのところだが、また、ポイントが高いし、何より、弓道部で弓を引く時の凛とした姿もかっこいいしさ」

「そんなものなのかな」

クラスメート達は深月が可愛いと言いだし、利光はクラスメート達の反応にどうして良いのかわからないようで戸惑ったような表情をする。

「久保くんは弓永さんの事を幼なじみとしてないんだよね？ それなら、今度、紹介をしてくれないかい？」

「ちょっと待て。ずるいぞ。久保くん、弓永さんを僕に」

「抜け駆けするな」

しかし、利光の戸惑いなど気にする事なくクラスメート達は利光に深月を紹介して欲しいと言い始め、部屋は誰が利光に深月を紹介して貰うかと言い争いになり、

「……やっぱり、深月は人気があるんだね」

利光は深月の人気には気づいていたようでそうつぶやくと1人になりたいたのか部屋を出て行く。

第15問(前書き)

本編の第352問の後になります。ここからは本編と連動している部分も出てくると思いますので本編と重ねてお楽しみください。

第15問

「と言う事なんだよ。だから、利光、ボクに勉強を教えて」

「……まったく、君はもう少し考えて行動ができないのかい？ 君の成績で大将なんてやったら、狙われるに決まってるじゃないか。それにここはAクラスとFクラスの自習室だよ。Eクラスの君がここで勉強をされていて問題にならないのかい？」

「良いでしょ。自習をやってる事には違いないんだから、ばれても理音がどうにかしてくれるし、それにこの間、行ったよね。ボクは瑞希と吉井くんの事を応援してるの。利光にはちょっと悪い事をしてるけどね」

深月は理音と優子から別れると利光に女子軍の大将になった経緯を話し、利光に勉強を教えて欲しいと言うが利光は深月の行動を短絡的だと言いたげにため息を吐くが、深月は利光をからかうように言いながらも本気で瑞希の事を応援しているようであり、

「勉強を付きあうのはかまわないけど、人前でおかしな事は言わないでくれるかい？」

「はいはい。了解しました」

「……それでのどの教科を教えたら良いんだい？」

利光は深月の様子に眉間にしわを寄せながらも彼女を見捨てるような事はせずに深月の前に座ると深月にどの教科を教えたらいいかと聞く。

「一先ずは現代文と古典を中心になかな？ 全教科やる時間なんてないし、ボクの守りに付いてくれる本宮さんはその2教科が得意みたいだから、女子本陣はその2教科が中心になると思うし」

「……弓永さん、そう言うのは僕の前で言わない方が良いんじゃないかな？」

「別にかまわないでしょ。どうせ、利光はこの試召戦争自体、興味がないんですよ。それにボク達の戦術を言っただけで回るほど利光は人生に器用じゃないし、それとも利光は最高得点を取りに来るのかな？」

深月は自分の身を守る教科を現代文と古典に見据えているようであり、利光は女子の要の戦力になるかも知れない事を簡単に話す深月にため息を吐くが深月は利光の考へてる事などお見通しと言いたげに言いながらも利光の事は信用しているとと言うと、

「……深月の言う通り、僕は参加するつもりはないよ」

「でしょ……そう言えば、男子から男子、女子から女子にも有効なのかな？」

「……だから、おかしな事を想像して目を輝かせないでくれないかい？ それに時間がないんじゃないのかい？」

利光は深月の言う通り試召戦争には乗り気ではないと言うと深月は利光が命令をしたいのは男子生徒である『吉井明久』であるため、何かを考えだして目を輝かせ始め、利光は深月の様子に肩を落とすし、

「そうだね。少なくとも150点くらいは取れるようになりたいか

な？」

「……弓永さん、ちなみに今の点数は？」

「調子が良ければ90点は取れる。基本は60点。文系は読む専門で問題を解くのは無理」

「……弓永さん、簡単に言うけど今までの点数の倍以上にしると言うのは無理がないかな？」

深月は簡単に点数をあげたいと言うと利光は今の深月の成績からは難しいと眉間にしわを寄せるが、

「無理は承知だよ。それでもやらなきゃいけないから、利光を頼ってるんですよ。今日のボクは本気だよ」

「わかってるよ。それに弓永さんの集中力なら、できなくもないと思うのが不思議なところだね」

「そう言われると照れるなあ」

「……遊んでないで始めるよ」

深月は本気を出すと言い、深月を知らない人間が聞けば冗談を言っているようにしか見えないが利光は深月ならやれると思う部分もあるようにため息を吐き、深月は笑顔で言う「利光は自分の教科書とノートを開き深月に勉強に付き合っ」

第16問

「いや、圧巻だね」

「あ、あの。弓永さん、下がっててください」

男女間の試召戦争が開始して男子軍の総攻撃が始まり、女子軍本陣も男子軍に対抗するために前に進むがまとめ役の優子がいなくなつた事もあるのか前に出る深月に葵は心配そうに声をかけるが、

「さつきも言ったよね。ここは前に出る時だよ。男子軍の清瀬くんも出てきてるんだから、僕が相手をするのが筋でしょ」

「で、ですけど」

深月はくすりと笑うが葵はそれでも深月を後ろに下げようとした時、

「いたぞ。女子軍の大将だ!!」

「見つかったね。葵、みんな行くよ。フィールドは葵がいるから現代文、古典を中心に展開。フィールドが変更された場合は1人で戦わない事、負けそうになっても諦めないで絶対に助けるから」

男子生徒数名が深月を見つけ、深月はこちらに向かってくる男子生徒を前にして落ち着いた様子で女子生徒達に指示を出すと、

「女子軍大将の首、貰った」

「させません。Bクラス本宮葵が受けます」

Dクラスの男子生徒は深月がEクラスだと知っているようで自分達でも大将の首を捕れると判断したようで数名が突撃してくるがその間に葵が割って入り、

「ありがと。葵」

「い、いえ、木下さんとも約束しましたし、それに私は弓永さんが羨ましいんです。みなさんの前に立つても笑顔でみなさんを引く張っていけて、私にはできない事ですから、お手伝いがしたいんです。姫路さんや他の人の事も考えてあげられる弓永さんの強さを分けて貰えれば私ももっと強くなれる気がしますから」

「あはは。ボクはそんなに強くないよ……ただ、強がってるふりをしてるだけだよ」

深月は葵に礼を言うと葵は深月を本気で手伝いたいと思っているようであり、葵が深月の想いに答えたいと言った事で女子軍の指揮は高まつて行くが深月は女子生徒達の盛り上がるのなか1人誰にも聞こえないように自分の弱さをつぶやく。

「おお。何か盛り上がったるな」

「ま、待つんじゃない？ 清瀬、大将が前に行きすぎるのは危ないのじゃ」

「わかってるよ。落ち着け！！ 飛び出すな！！ 連携も取らずに前に飛び出しすぎるとフォローができなくなるんだ。逃げ場がなくなればいくらAクラスの間でも何もできなくなる事は見てきただろ！！ 個人の力だけでどうにかできるのは奇襲や敵の油断を付い

た時だけだ！！ 自分の力を過信するな。仲間を信じろ！！」

大樹は目の前の女子軍の指揮の高さに苦笑いを浮かべると秀吉は前に行こうとする大樹を抑えようとするが大樹は大きく1つ息を吐くと男子軍全員に聞こえるような大きく響く声で指示を出し、その指示で深月に突撃して行こうとしていた男子生徒達は思いとどまり、

「き、清瀬、お主、そんな声も出るのじゃな？」

「肺活量には自信があるんだ。それより、気を付けないと木下の彼女はちよつと強力そうだからな。古典や現代文でフィールドを固定されてるうちは勝ち目はない。その上、他も普通に高いだろ？」

「う、うむ。理音に聞いたのじゃが、元々、Bクラスでも成績はかなり上位のはずじゃ。それ以外にも今は古典と現代文の2教科は飛び向けておる」

秀吉は大樹の音量に驚いたような表情をするが大樹は葵が出てきた事で状況は不利になってきているため、冷静に葵の戦力を秀吉に確認すると秀吉は葵には弱点らしき教科はないと頷き、

「……あはは。攻めてこないか？ やっぱり、優子が誰か上手く戦術を立てられる人が欲しかったかな？ ボクじゃ次の手段は思い浮かばなかったよ」

「弓永さん、自分を囷にしていたって事ですか？」

「それしか作戦が思いつかなくてね。葵がいれば持ちこたえれると思っただけどね」

まとまり始めた男子軍の様子を見て深月は困ったように笑うと男子生徒を補習室送りにした葵が深月の作戦に驚いたような表情をする。深月は苦笑いを浮かべるが、

「相手もしつかりと連携をとってきているよ。一人で深追いはしないで、葵、ボクに付いてきて押されているところを助けに行くよ」

「は、はい」

直ぐに切り替えたようで大きく深呼吸をすると不利になっている女子生徒達を助けに走って行く。

第17問

「引き分けって感じかな？」

「そうですね」

試召戦争の終了時間になり、深月は男子の大将である大樹を討ち取れなかった事に苦笑いを浮かべると葵は体力がないように深月に付いて回るのが精一杯だったように廊下にへたりこみ肩で息をしている。

「お疲れさま。葵、葵がそばにいてくれて心強かったよ」

「そ、そんな事はないです！？ わ、私は鈍いから足を引っ張るだけ」

「まあ、ちよつと……かなり運動神経は良くなかったけど」

深月は葵に手を差し出すと葵は深月の行動にどうして良いかわからないようであたふたと慌て始めると深月は葵の様子にくすくすと笑うと、

「やっぱり、友達がそばにいてくれると心強いんだよ。ボクは葵と違って成績が良いわけでもないし、大将だから、負けた時の事を考えちゃうからね」

「と、友達ですか？」

「何？ 葵はボクを友達だと思ってくれないわけ？」

「そ、そんな事はないです。で、ですけど、ゆ、弓永さんは明るくてキラキラしてて、強くて」

深月は大将を引き受けたもののやはり不安な部分もあったようであり、葵に助けられたと言うが葵は自分とは真逆の感じがする深月が羨ましいようで彼女から視線を逸らしてうつむいてしまう。

「葵、ボクはそんなに強くないよ。それにボクは葵みたいなタイプの方が羨ましいんだから」

「ふみや あああ!?!?!?」

「お、お主は何をしておるのじゃ!?!?」

深月は葵の様子に何か思いついたようでニヤリと笑うと葵の背後に回り込み、彼女の理音、康太曰く文月学園2学年最強の巨乳へい乳と名高い葵の胸に手を回すと深月のいきなりの行動に葵は今まで出した事のない声を発すると葵の姿を見た秀吉が駆け寄ってきて深月の行動を責めるが、

「ほう。このサイズはやっぱり瑞希を超えるね。瑞希よりはそうだね……1・5311センチ? いや、1・5282センチも上だね。実際のサイズで言うと……」

「おかしな事を言わないでください!?!?」

「そ、そうなのじゃ!?!? お主は何をしておるのじゃ!?!?」

深月は葵の胸のサイズを揉み慣れている瑞希のサイズと比べると葵

は顔を真っ赤にして彼女から逃げ出し、秀吉の後ろに隠れると秀吉は葵を深月から隠すように立ち、深月を責める。

「木下、そうだぞ。ちゃんと本宮さんの胸は自分のだと主張しないとな」

「き、清瀬、お、お主はな、何を言つておるのじゃ!？」

3人のやり取りに気づいたようで大樹が秀吉をからかうように笑い、秀吉はその言葉に顔を真っ赤にして否定しようとするが秀吉の目は泳いでおり、

「弟くん、素直だね」

「前田から聞いたけど、前田が巨乳好きから乳好きに格上げた事で文月学園の巨乳好きのトップは吉井と木下の2大巨頭になったぞうだ」

深月と大樹は秀吉をからかい続けると、

「き、木下くん、私の胸が目的なんですか？」

「ま、待つんじゃない!? 本宮、なぜそうなるのじゃ!？」

葵は秀吉が自分ではなく自分の胸が好きだと思ったようで逃げ出して行き、秀吉は慌てて葵の後を追いかけて行く。

第18問

「ちよつとからかい過ぎたかな？」

「そうかもな」

深月と大樹は秀吉と葵の背中を見送り苦笑いを浮かべると、

「それで、弓永さん、本当は本宮さんの何が羨ましかったんだ？」

「何って、これだよ。羨ましいでしょ？」

「……手をわきわきさせるな」

大樹は深月と葵のやり取りに何か違和感を覚えたようだが深月の手は葵の胸を揉んだ時の手の動きを続けており、大樹は大きく肩を落とす。

「だってさ。葵は可愛い女の子って感じでしょ。ボクは違うからね」

「まあ、確かに一見、美人なキレイ系だしな」

「……いや、そう言われると照れるんだけど」

深月は大樹の様子に苦笑いを浮かべると大樹は特に照れる事なく、あっさりと深月を美人だと言つと言われた深月の方が照れくさそうに視線を逸らすと、

「清瀬くんは、そんな事を簡単に言つて良いの？ 清水さんは嫉妬

深そうだよ」

「……嫉妬するかはわからないけどな」

「清水さんは清瀬くんに甘えてるからね。ずっとそばにいてくれると思ってるだろうし」

「……まあ、そのつもりではあるんだけどな」

「……同じ幼なじみでもどうしてこんなに違うのかな？」

深月は反撃に転ずると今度は大樹が気まずそうに視線を逸らし、深月は大樹の様子に大樹と美春の姿が自分と利光とは重ならない事がさびしいようで小さな声でつぶやくが、

「無理してるうちはダメなんじゃないか？」

「な、何が!？」

大樹はそのつぶやきを聞き逃しておらず、大樹の違和感深月の様子に確信に変わったようであり、深月は驚きの声をあげる。

「無理するのは疲れるぞ。無理して距離を取ろうとしても、割りきろうとしても、自分の心に嘘を吐いて諦めようとしているうちはきつと忘れる事も嫌いになる事もできないと思うけど」

「……どうして、そんな事を言えるの？」

「ん？ 経験談かな？」

大樹は深月の今の状況と自分の過去の葛藤を重ね合わせたようであり、苦笑いを浮かべると、

「……まあ、久保もベクトルが違うけど美春と同種の人間みたいだしな。お互い、おかしな人間に人生を狂わされたもんだ」

「……何でよりもよって同性愛かな？」

深月は男女間の試召戦争を決めた代表会議での美春の様子を思い出したようで大樹と自分の共通点に力なく笑う。

「まあ、久保の場合はまだ何かが引っかかっている気もするけどな」

「何か？」

「そ、何かがね。それに気づけるかは弓永さんしだいだと思うけどね」

「私しだい？」

大樹は深月の様子を見てくすりと笑うが深月は大樹が言いたい事がわからないようであり、首を傾げると、

「『無理』はしないようにな。俺はそろそろ自習室に戻るから、そうしないと西村先生の補習から解放された美春が島田さんに迷惑をかけるから」

「……そうだね。清瀬くんも頑張ってるね」

「まあ、頑張るよ。そっちも頑張ってくれ」

大樹はこれ以上は自分ではなく深月が頑張る事だと思っているように彼女を応援するとCクラスとDクラス合同の自習室に向かって歩き出し、

「無理？ 清瀬くんには私が無理してるように見えるんだ。ダメだね。もっと頑張らないと私が私でいるために……」

深月は小さな声でつぶやくが深月の頑張る方向は大樹の言った事とは逆方向への頑張りである。

第19問

「やっぱり、足が伸ばせるお風呂って良いね」

「そうね」

DEFクラスの入浴時間になり、深月は宏美と浴槽に浸かっている
と、

「深月ちゃんもお風呂ですか？」

「ウチと瑞希も一緒しても良いかな？」

瑞希と美波も入浴にきたようで2人に声をかけてくる。

「瑞希、揉んで良い？」

「ダ、ダメです！？ いきなり何を言うんですか！？」

深月は瑞希の身体を舐めまわすように見た後、手をわきわきさせながら瑞希の成長しすぎている1部分を見て言うと瑞希は美波の後ろに隠れるが、

「そうよ。どうして、こんなものが付いているのよ！！ 不公平よ
！！」

「や、止めてください！？ 美波ちゃん！？」

隠れた先が悪く、美波は嫉妬混じりの視線を込めた声で瑞希の胸に

手を伸ばした時、

「まあ、これはこれで良い」

「ひゃう!? な、何をするのよ。弓永さん!？」

深月はニヤリと笑いながら美波の背後から彼女の少しさびしい胸に手を伸ばし、美波は驚きの声をあげ、

「……弓永さん、止めなさい」

「そ、そうですよ」

深月の行動に瑞希と宏美はため息を吐く。

「理音に感謝かな? 理音が気を利かせてくれなかったら、たぶん、部屋の個室風呂に入る事になってたしね」

「何で、前田に感謝なのよ?」

4人で浴槽につかると深月はゆっくりと入浴できる事を理音のおかげだと思っているようで笑顔で言うが美波は深月を警戒しているのか彼女から距離を取りながら、深月に聞き返すと、

「昨日もそうだったけど、理音が何かやってくれないとFクラスの男子達は覗きに走るでしょ。そうなるような風に広い大浴場で瑞希の胸も島田さんの腰のくびれも代表の生足も他にも素晴らしい物を拝めなかったわけだし」

「……西村先生に言って、清水さんと一緒に弓永さんも一緒に個室

風呂に入って貰うべきかしら？」

深月は女子生徒の裸を見れる事が嬉しいと言い切り、宏美は大きくため息を吐く。

「……美春はいないのね。良かったわ」

「ええ、ちよつと、島田さんへの行動が目に残るって代表会議で議題にもあがってね。清瀬くんが西村先生と高橋先生に頼みこんでたわ」

美波は美春と同じ入浴時間のため、警戒はしていたようで安心したようにつぶやくと宏美は盗撮犯の犯人が美春だと言う事を瑞希と美波には言っではいけないと思ったように苦笑いを浮かべて誤魔化し、

「だけど、清水さんは羨ましいです。あんな風に暴走しても清瀬くんが居てくれますし」

「ウチとしてはもっと清瀬に頑張っで欲しいわ」

瑞希は大樹と美春の関係が少し羨ましいようで小さな声でつぶやくが美波は大樹がしっかりしないから、自分に被害がきていると思っているようである。

「島田さん、清瀬くんのせいにするのはどうかと思うよ。清瀬くんは頑張ってるしね。だいたい、本当にイヤなら、もう少し、はっきりと拒絶するべきだよ」

「う。でも、ウチは美春を友達だと思ってるし、美春はウチがドイツにきてから始めて仲良くなった女友達だし」

深月は美波の態度にも問題あると言つと美波は美春を見捨てられな
い何かがあるようであり、

「その行動が自分の首を締めなければ良いけどね。甘やかすのつて
本当の優しさじゃないつてぼくは思つけどね。まあ、それがわから
ないから、自分も清水さんと同じ行動をとつてるつて気付かないわ
けどね」

深月は美波の行動に何か気付いたよつで頷いた時、男子浴場の方か
ら騒ぎ声が上がら始める。

第20問

「結局、覗き騒ぎになるんだね」

「そ、そうみたいです」

壁越しに聞こえる覗きを画策した男子生徒達が理音に狩られている声に女子側の大浴場は微妙な空気になっており、深月はバカをやっているであろう男子生徒達の様子が目に浮かんだようで楽しそうに笑うと瑞希は顔を引きつらせながら頷くと、

「あ、あの。深月ちゃん、今日はありがとうございました」

「え？ いきなり、どうかしたの？」

瑞希は何かを思ったのかいきなり深月にお礼を言い、深月は彼女のいきなりの行動に首を傾げる。

「あ、あの。今日の女子の大将の事なんですけど」

「ああ。別に気にしなくて良いよ。さっきも言ったでしょ」

「で、でも、深月ちゃんだって、誘いたい人がいたんじゃないですか？」

瑞希は自分の代わりに深月が女子の総大将になってくれた時の事のお礼を言いたいようであり、深月はお礼を言われる事はしていないと笑うが瑞希は自分と同じように好きな人をデートに誘いたかったのではないかと聞き、

「いないよ。ぼくにはそんな人はいないから、瑞希は気にしなくて良いよ」

「み、深月ちゃん……」

深月は笑顔で瑞希に向かい『好きな人はいない』と言い切るが瑞希は彼女の表情に何かを感じたようであり、辛そうに目を伏せてしま

い、
「それにお礼だって言うなら、ぼくはこの胸を揉ませて貰えばそれだけで」

「や、止めてください！？ 深月ちゃん！？」

「上は流石のポリウムだね……そうなると下は？」

深月はこの話を強制的に終わらせようとしたのか瑞希の胸に手を伸ばし、瑞希は彼女の手から逃げるように身を振るが深月は更なる追い討ちをかけようとし、

「だ、ダメです。深月ちゃん！？」

「……弓永さん、いい加減にしなさい」

瑞希は泣き出しそうな声を上げ、宏美は呆れ顔で深月を止めた時、

『あの壁の向こうは楽園だ！！』

『ここで行かずしてどこへ行く！！』

壁の向こうで死にかけていたはずの男子生徒達は勢いづき、

「……深月、余計な事をするな。バカどもが勢いづく」

「う、うん。気を付けるよ」

壁の向こうからは理音の呆れたような声が聞こえ、深月は苦笑いを浮かべる。

「冗談は置いておいて、さっきも言ったでしょ。瑞希は気にしなくて良いの。ぼくが瑞希を応援したいから、ぼくはぼくの意味で動いたの。それを瑞希が気にする事はないんだよ。それにみんなが守ってくれるから、ぼくは補習室に送られなくて済んでるわけだし、鬼の補習より楽だよ。みんなが守ってくれるんだよ。お姫さま気分だよ」

「そ、そうですね？」

「ごめん。ぼくはそろそろ上るね」

深月は改めて、瑞希に気にする事はないと笑うが瑞希は大将で女子生徒達が守ってくれろと言ったわりには前線で男子軍との女子軍の直接対決をくぐりぬけている深月の話も聞いているためか複雑そうな表情で頷くと深月は風呂から上がると言い始め、

「あ、あの。深月ちゃん」

「……姫路さん、そっとしてあげなよ。姫路さんが頑張ってるのと同じように弓永さんもきつと何かを頑張ってるんだから」

「そうかも知れませんが、深月ちゃんが私を応援してくれるように私も深月ちゃんを応援したいんです。私、いつも、深月ちゃんに応援されているだけですから」

「そう思ってるなら、弓永さんが弱音を吐いた時に助けてあげたら良いのよ」

瑞希は深月を追いかけてようとしますが宏美は深月の様子に何かを感じたのか瑞希の手をつかんで彼女を引き止めると瑞希の気持ちもわかるが今はその時ではないと苦笑いを浮かべる。

第21問

(……はあ。自分で言うのもなんだけど、女々しいな)

深月はお風呂から上がると1人で夜空を見上げていると、

「あれ？ 弓永さん？」

「吉井くん？ どうしたの？ 吉井くんも風に当たりにきたの？」

明久が深月を見つけて声をかけ、深月は直ぐにいつもの笑顔の仮面をかぶる。

「ボクはこれから木下さんに頼んで勉強だよ」

「吉井くんも頑張るね。そんなに誘いたい女の子でもいるのかな？」

「そ、そんなんじゃないよ!? ボ、ボクが勉強をしないとイケないのはボクの生命と尊厳を守るためだよ!!!」

明久は勉強はしたくないが美春と美紀から逃れるためだけに少しでも点数をあげたいようであり、

「そんな事を言っていないで、本気でトップを狙ってみたら良いじゃない。吉井くんなら、誘ってくれた女の子は喜んでくれるよ」

「弓永さん、そう言う冗談を言わないでよ。そんな冗談でもFクラスに聞かれるとボクはグロテスクに殺されちゃうよ」

深月は利光の事もあるためか、暗に瑞希を誘うように応援するが明久はまったく意味がわかっていないようで首を傾げる。

「そうか。ぼかしながら言ってもダメか。トップを取って瑞希を誘いなよ。瑞希、絶対に喜ぶよ」

「姫路さんを？ 無理だよ。だいたい、ボクがトップなんて取れるわけがないでしょ」

深月は直球で瑞希を誘えと言ってみると明久は苦笑いを浮かべ、

「それなら、弓永さんはどうなの？ 弓永さんなら、誘えばどんな男子でも願ってくれるでしょ」

「どんな男の子でもね……」

明久は深月はどうなんだと聞き返すが深月は明久の言葉に自分の思い人である利光の顔を思い浮かべると、

「それこそ、無理だよ。私の想いは絶対に届かないから……」

「弓永さん？ どうかした？」

「何でもないよ」

深月の仮面は一瞬、剥がれ、明久はそんな深月の変化に直観的に気づいたのか心配そうに深月の顔を覗き込み、深月はそんな明久の顔に彼が利光の想い人でもあるためか少なからず、嫉妬心があるようで小さく胸が痛み、明久を押しつけるように手を伸ばす。

「う、ごめん。ボク、何かした？」

「そうじゃないよ。流石にこんな夜更けにFクラスの吉井くんのはばは身の危険を感じただけだよ」

「そ、そう言われると少し落ち込むんだけど」

明久は深月から一瞬見えた、自分への拒絶に気づくと深月は笑顔で明久をFクラスだからと言い切り、Fクラスを出された事に納得はしたようだがそれでも何か引つかかるようで小さく肩を落とすと、

「ありやりや、落ち込んだじゃった？」

「そ、そう言うわけじゃないけど」

今度は深月がイタズラな笑みを浮かべて明久の顔を覗き込むと明久は深月の顔がすぐ目の前にある事顔に顔を真っ赤にして飛びのき、

「吉井くんはぼくにキチンと反応してくれるんだね」

「そ、そりゃあ。弓永さんは美人だし。こんなキレイな幼なじみがいる久保くんが羨ましいよ。ボクの幼なじみはリオだし。ボクにも可愛い幼なじみがいれば良かったのに」

深月は明久をからかい始め、明久は自分も女の子の幼なじみが欲しかったと苦笑いを浮かべ、

「そう？ ぼくは同性の幼なじみが羨ましいよ」

深月は何も知らない明久の言葉に胸がちくちくと痛むが無理をして

笑っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1352n/>

秘めた想いと倒錯娘

2011年12月2日00時47分発行